

土 淨

號 月 六

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十九年五月廿日印刷本・昭和十九年六月一日發行

第十卷 第六號



安西覺承著

法然上人の和歌

B6版六十四頁 定價五十錢 送料六錢

上人の御作として確實な和歌二十首について一々懇切な語意、通釋、感想をのべた和歌註解の定本。上人の法の歌の中によく御遺徳の結晶をみる。

増谷文雄著

行誠上人

B6版二百三十頁 定價一圓五十錢 送料十八錢

近世不世出の高僧、謹嚴にしてしかも脱俗洒々たる上人の風格、言行がそのまゝ信仰の現れである。上人に傾倒する著者が渾身描き出した全傳成る。

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

林靈法著

法然上人を憶ふ

B6版四四〇頁 實費三圓 (送料共)

著者は思想上に懷疑懊惱を續け、遂に凡入報土に救はれた體驗を通し、告白と懺悔の内に法然上人の教義をつたつた。

(本會で取次ぎます)

○振替にてお拂込みの場合は何れも十錢増○

浄土 六月號 目次

表紙・カット……………中島保

國難に處して強かれ……………池田立基(四)

筒鳥の聲……………吉田絃二郎(一)

興安櫻をお贈り下さい……………高橋安子(六)

信仰相談……………(二〇)

貝子廟の打鬼……………貴司山治(三)

歌壇……………岩野喜久代選(八)

俳壇……………太田耳動子選(九)

法語解説 時に懸命の念佛を……………中村辨康(五)

編輯後記……………(一八)

第十卷
第六號
淨土



二二

筒鳥の聲

吉田絃二郎

まだ夜が明け切らない間から庭に來て小鳥が鳴いてゐる。その聲は晩秋初冬に訪れる鶺鴒に似て、きはめて靜かである。

けさもその鳥の聲に眠りをさまされた。

じつと眼をつむつてゐると、千鳥の聲も聞える。多磨の田圃を飛

んでゐるのであらう。鶺鴒が鳴き、三光鳥が鳴く。

枕頭には鐵兜があり、非常用の物を入れた背負袋が置いてある。

耳を澄まして聴くと遠く哨戒の飛行機が飛んでゐる。

起きて佛前に香を焚き、靜かに今日一日のことを思ふ。今日は今

日の事のみを思へば足れり、といふ言葉が今日ほど、びつたりと胸

に來ることはない。

今日一日の命であり、この刹那のみの命であると思へば、香のか

ほりも一しほなつかしく、朝の一時もいつになく尊く、ありがたい

幾年、幾十年の間、佛前に香を焚いたであらうが、このころのや

うに、香のかほりを、或は朝の一時を尊く、ありがたく感じたこと

はないであらう。

街のいろいろな不親切が話題に上る。眞實、驛に行つて一枚の切符を購めるにも、不愉快な思ひをしなければならぬことが多い。し

かし世間には不親切ばかりが、はびこつてゐるわけでもない。お互の交友の間を考へて見ると、今日ほどお互に交友の苦しみを察し、交友の親切を身に泌みて深く感じたことはないであらう。たゞ一顆の林檎、一粒の米に對しても、今日ほど深い感謝をさへげられたことはない。

昔は親切な人ばかりゐたわけではない。昔もずるぶん不親切な人はゐた。今日でも親切な人はたくさんゐる。悪貨がはびこると善貨が影をひそめるが、善貨そのものは必ず何處かに存在してゐる。

「商人は人間に非ず」と憤られるほどの商人のあることも事實であるが、これは今に始まつたことではない。

昔、光悦は京の富める商人を知つてゐた。

或る年の大晦日の夜光悦は、その富める商人の家を訪ねた。大晦日のことではあるし、たくさんの人々が夜寒の風に顫へながら、店頭に列んでゐた。光悦は不審に思つて、そこに立つてゐる人にわけを問うた。

「このお店ではいつの大晦日にも勘定は九つ（夜の十二時）を過ぎなければ、支拂はぬことになつてをります。九つ前に支拂ふのと九つ過ぎて支拂ふのでは、一日分の金利がちがひますから」と一人が答へた。

光悦は

「わづか一日の金利を儲けるために、多勢の人々を冬の夜

寒に、夜明け近くまで戸外に立たせるとは、さてさて人非人の所業である。一刻も早く若干の金を手にして家にかへり、女房子をたのしませ、明日の元日を迎へたいと思ふが、人情である。何といふあさましい心であらう。かやうなあさましい心の人も知らずわしは四十年の間、かれと交りをつゞけてゐたことが恥づかしい」と歎じ、ふたゝびその富商の家を訪るゝことをしなかつた。

今日でもかやうな商人はたくさんゐる。

しかし商人にも坂根翁のやうな立派な人もある。

また武士にも大野九郎兵衛のやうな人もあつた。

矢頭右衛門七は討入の時わづかに十七歳であつたが、折悪しく父に死なれ、一人の母を、越後の松平大和守藩中にゐる叔父に預けるため、母子相伴うて大阪を立ち、越後へ出かけて行つた。ところが何をいつても年少のことではあるし、女の關所切手を携へることを知らなかつたため、荒井の關で、とがめられ、みすみす母を連れてふたゝび大阪まで立ちかへらなければならなかつた。

そのためわづかの旅費も使ひはたし、殆んど無一文の姿で、東海道を下り、江戸に着いて、討入に加はつた。

大身の大野九郎兵衛は武士の道を踏みはずし、小身の右衛門七は天晴れ武士の名を残した。一は金錢に囚へられたためである。一はひたすらに名を惜しんだためである。

今の世に金を貪らうとする者は人間ではない。いかなる職域に在らうとも非人間である。官吏であらうと、工人であらうと、農民であらうと問ふところではない。

日本中の人が、その父を、子を、夫を、兄弟を戦線に送つて、朝夕、吾夢の中にもその武運長久を祈つてゐる今日貪る心を抱く者は人間ではない。

このころは雨催ひの日がつゞくので、時折り筒鳥の聲を聞くことができる。森のしげみの間から流れて来る筒鳥の聲を聴いてゐると、朝夕に焦躁り、惑ひ、憂ひ、恐れてゐる昨今のわが心を恥ぢるやうな氣にもなる。

昔の聖達は筒鳥の聲を聴いては、一切經堂裡に永劫の光りを覓められたであらう。その聖達と同じ心になつて筒鳥の聲を聴くことができれば、わたくしたちの今日の生活は恵まれてあるといはなければならぬ。

筒鳥は二千年三千年前から鳴いてゐる。光悦も利休も小堀遠州も筒鳥を聴いて心を澄ましたであらう。今日も筒鳥は啼いてゐる。わたくしたちの心構へさへできてゐれば、利休が養ひ得た寂びの世界も今朝この利那に感じられる筈である。

多磨の田圃にも近年白鷺が殖えて來た。

初夏の青田に悠揚と飛んでゐる白鷺の群を見るのはまことにすがすがしいものである。

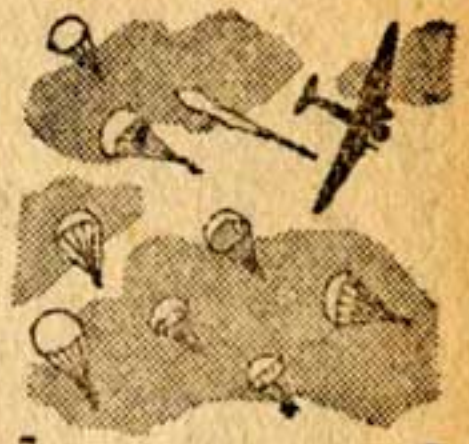
日本ほど美しい自然に恵まれた國は世界の何處にもないといふことは、すべての世界漫遊者が語るところである。この美しい自然を見るにつけても、日本人の心の美しさを傷つけてはならぬ。

徳川の末期に日本の港に立ち寄つた一外國人船長は「世界の何處の港へ入つても船室へは鍵をかけなければならぬ。たゞ日本の港へ入つた時だけは鍵の必要はない」と語つてゐる。

また或るロシヤの士官は幕末のころわが北境で俘虜になつたが「日本人は一人としてわれわれを侮辱する者とはなく、いかにも氣の毒さうな眼でわれわれを見送つてくれた」と言ひ、さらに二年の後ゆるされて歸國するに際しては「所持品一つ残らず揃へて返してくれた。」とも語つてゐる。殊にロシヤの士官を驚かしたことは、小ひさな紙切れに包んだ所持品が、水に濡れたのには、わざわざ附箋を附けて、理由書がしてあつたことであつた。

今日敵米英人の非人間的行爲と比べる時、神と野獸ほどのちがひがある。

日本の自然は世界一の美しさである。日本人の心も世界一の美しさを持ちつゞけなければならぬ。日本人の心が美しいかぎり戦さは勝つといふことをよくよく考へなければならぬ。



國難に處して強かれ

池田 立基

釋尊が此世に出現せられ、黃卷朱軸七千餘卷の大聖教を遺されたのは、決してあの世への案内者としてではなく、現在生活の指導者として教へを垂れたのである。三世の事相を説かれたのも、現在に於て如何にしたらよりよく生きられるかを教へられたのである。元來人間は只一人だけで生き得るものでなく、實に一切衆生のお蔭を以て生きて居るのである。人間は人間同志互に助け合つてこそ初めて生活し得るのである。従つて自分獨りの幸福を欲する者があるとすれば、それは不都合である。己が幸福を願ふ時にはそれより前に先づ他人の幸福に關心を持たなければならぬ。何故なら多くの場合、自分の幸福は他人の犠牲によつて得られるものであるからで、自己の幸福感和同時に他に對する感謝の念と報恩の覺悟を持たなければならぬ。即ち時來らば自己を犠牲にしても他の幸福を圖らなければならぬ。其氣持で人類は共存

共榮の生活をお営むのでなければならぬと、佛典には説かれて居る。他の幸福を見聞して自ら幸福感到に浸り得るのが即ち佛教で云ふ大菩薩心である。

一死以て國難に殉ずるものこそ、まことに大菩薩である。大東亞幾億民衆の福祉増進の爲に大日本帝國が血と物を抛つて一大樂土を建設せんとする聖業こそは大菩薩行である。この大菩薩行中のわが國が當面せる、盛國以來の國難に際し、國の上下を通じ、一億が一心となりこの大菩薩心の完璧を期さねばならぬ。しかしながら各人が皆大菩薩心に活きるために徹底せる覺悟をもつことは容易のことでない。吾人の極めて狹隘なる見聞中にもそれには可成りの疑問、相當の掛念を拂拭し得ざるものがある。

「一億火の玉」と云ふ標語が躍る所街頭に張り出され、「一機でも多く第一線へ」の叫びは、頻繁に耳朶を打つ。だが慄むらくは其反響の未だ

十二分ならざるを憂へざるを得ない。盡忠報國の精神は日本人共通のものであるに相異ないが、矢張り人によつて強弱深淺の差の存するものが認められる。一方に興奮火の如きものあるのに、他には熱しても未だ火を噴かぬものあり、一億を悉く赤誠の火の玉とするには尙若干考慮の餘地なしとは云ひ得ない。

軍の強味は一つの命令によつて動く所にある。普通社會の難點は多種多様の複雑性のあることである。この一億民衆を一塊の火の玉とするには、云ひ知れぬ苦心と困難が伴ふ。

眞理であつても、善い行であつても、必ずこれに批難論争する者が現れ、有徳者聖賢に對しても、これを仇敵視する輩の存在は免れることが出来ない。國策國是の向ふ所如何に正しく、如何に緊急忽にすべからざるものであつても民衆中には身分の上下、貧富の差、生活の様相、職場の相違、老若男女の區別によつてとかく箇人箇人の立場より見勝ちである。國に對する觀念、國難に處する覺悟が不同になり易い危險が多い。従つてこれを統一し、不可分の一塊として最大の力を發揮せしむるには、何事によらず一億國民共通の物たらしめなくてはならぬ。これ最肝要にして缺くべからざる總力發揮の要因

であると思ふ。

盡忠報國の日本國民にとつては説明の要なき、また異議論争の隙なき、一億一東の純潔である。これによつて時局下一億國民の思想統一を策すべきは論を俟たざる所であるが、此の盡忠報國の精神を一億國民箇人箇人の衷心より湧出する自發的な最も力強きものとなすには、其等箇人箇人の周囲の條件が多種多様であればあるだけ、その機に應じて説明指導にも複雑微妙なる方法が無數に存在することと思ふ。

愛國誠忠の士には盡忠報國の語句に何等説明の要を見ないのである。しかし乍ら盡忠報國の念をます／＼昂揚し徹底せしめるため、民衆のすべての面に透徹するやう明確に、簡易に説き示し、以て漏れなくいよ／＼強固にせしめることを忘れてはいけぬ。従つて多少不純にしてしかも低級の思想より助長せしむるも亦忽にすべからざる方法である。

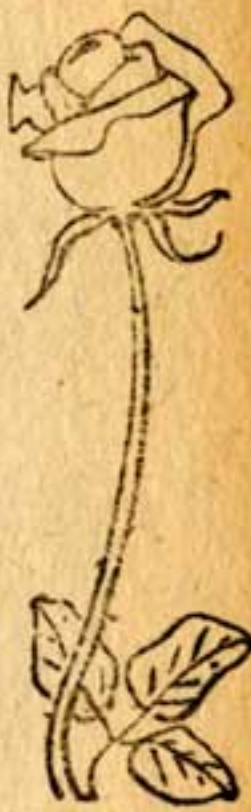
宗教家は賢聖や學者のみを對告者とするものでない。特に淨土教の如きは上根上機の者を嫌つて下根下機のものか、少くもこれを自覺せしめた後にこれを説く宗教で、且つ同時に信仰によつて人間中の最強者を作る宗教である。宗教は元來生命に對する永續、保存慾を出発

點とし、死に對する恐怖排除を目的として居る。然るに諸行は無常生滅の不動の法に従ひ人生は五十を越ゆるもの少く、朝露の如く電光の如き瞬間的存在に過ぎざる人生に、永久の生命を憶がるに至るのである。これが無量壽如来の建設された極樂淨土に往生を願ふ願往生心の確立、淨土に對する信仰の確立は死を恐怖より轉じて待望の對象とするのである。

死に對する恐怖なきものは、現在の生活に於て不安を一掃し、強度の生活能率を擧ぐることは明白であつて、人間として最も強き者となり得るのである。依つて盡忠報國の精神の上に更に此信仰に生き得るならば、その強さは計り知るべからざるものがある。

盡忠報國は絶對的であつて利害觀念より超然たるべきである。これ求める所の理想であるが、盡忠報國の四字を示して、ただそれだけですべてを一億國民の總てが悟了し得ないとしても止むを得ないことである。國民學校の兒童が「今日も學校へ行けるのは兵隊さんのお蔭です」と歌ふことが盡忠報國の稱揚であると同じく、或程度の國民には更に了解し易く、飲み込み易き説明の道程を闡却してはならないと思ふ。特に普通人としては生命の執着と同程度に利

害の打算を離脱せしむることは仲々容易のことであるまい。利害を離れ純なる盡忠報國の爲に産業戰士として働くものにも養ふべき妻子家族あり財物の收得より一切離脱せしめんとするに相當の努力が存するのである。この程度の者に對しては、有形無形を問はず、先づ與へ、一部の幸福を感受せしめる。而して後にこの幸福に浸り得るは抑も何が爲であるか、萬世一系の日本國に生を享けたるが爲であり、御稜威による所であることを悟らせる。愛する妻と子の爲には自己の一身を捨てるも惜しくないと云ふ心狀となる。茲に君恩が明了となる國恩が有難くなる。此程度の盡忠報國の精神はまだ純なものではないが、しかし極めて力強く一億の國民を一塊とする大なる求心力を形づくと云ふことは否定し得ざる事實である。鐵環はいくら堅くしても其内部に隙が出来て来る、内容自身凝集力があれば鐵環は不要である。自己を滅却する所に大なる奉公心が出来るのであるが先づ自己を完全に了解した後はじめて自己滅却の大意義があるのである。説くものも説かれるものも假相を除き實體を把握する所に眞の強さが出るのである。現在の時局下に於ては決して強がるべきでない、眞に強くあるべきである。



姉より弟への書翰――

興安櫻をお贈り下さい

高橋安子

――い、き下り贈おを櫻安興――

閏年の爲か今年はいつになく寒さが永く續いて、ずつと遅れた東京の花もいつしか梢を去つて、嫩かい若葉の新緑に包まれた清々しい天地となりました。春のおそい北滿の御地ももう大分暖かになりましたでせう。一夜にして花皆開き遍くばかりの春景色ともなるといふあなたの去年の今頃のお便りを思ひ出してどんなにか美しいでせうその有様をしのんで居ります。御元氣に張り切つて國防第一線に御活躍のことゝよろこんで居ります。

さて今日はあなたに重大な御報告を致し度いと思ひまして筆を取りました。それは先月の末俄かに一郎兄様に御召がありました、數日前嚙の入隊をなさつたことです、御兄様はいつも次から次へと召集を受けて勇ましく征て行かれる御友達を羨ましがつて、一人取り残された様に淋しく情無がつて居られたことですから、その

ました。その日は静かな雨の日でした、やはらかな芽立の緑が水に溶けて流れて地に染まりさうでした。樹木の多い屋敷町を通つて、早百合さんの御宅に着いた時は、何時になく緊張してしまつて、御玄關の呼鈴を押す指先が震へてしまひました。

「まあ、降りますところをよろこそ。父もち龍つて退屈致して居ります。どんなにかよろこびますこととせう。いつに變らぬ明るい笑顔で迎へて下さる早百合さんを見た時、私はそつと目を伏せてしまひました。私は今日は重い自分の使命を思つて打ち解けた四方山話も抜きにして、心を決して此度のことを言ひ出しました。皆様の御顔は一瞬緊張された様でしたけれど「それはおめでたうございます。一郎さんもさぞ、御本懐でせう。」と御父様は落着いて力強く、御自身も満足げに言つて下さいました。早百合さんも改まつてお辭儀を致しました。「それで此度の御縁談でございますけれど」と私は母上と兄上の意見を御話致しました。そして「そちら様の御考へは？」と伺ひました後、どの位でしたとせう。私にはとても長い時が過ぎた様に思つたのでしたけれど、やがて御父様は「自分はこの際、呉れ、と言はれるのでした

ら、よろこんで差し上げませう。又この御話を取り消して欲しいと言はれるのでしたら、それも止むを得ないことだと思ひます。たゞ凱旋の日迄御待ちするといふことは不賛成です。」言はれるのでした。この御父様の御言葉はほんとうに有難いと思つたのでしたけれど、これではやはりどうしてよいか私には解かりません。しばらく思案に暮れて居ります時「御父様」と早百合さんが申しました。私がつとして早百合さんを見ますと、早百合さんは静かに「私が今こゝでこの様なことを申してはおはづかしいのですけれど、でも自分の一生の大事と思ひますから、どうか聞いて下さいませ。」と、いゝから言つて御覽。」

と御父様は優しく言はれました。

「私は今迄何にもこの様なことを口に出しては申しませんでしたけれど、この様な日の來ますことは當然なことと思つて、かねて覺悟を致して居りました。今日日本は戦争中でございますもの。男子の戦場に征かれますことは、あたりまへのことでございます。女子は戦場には立ちませんでも、やはり男子と同じ様に戦時下の女子としての覺悟は出來てゐるつもりでございます。一郎様に御召があり晴れの征途に就かれま

す日は、私も女として晴れの門出をする日だと思ひます。一郎様はきつと御自分に萬一のことのあつた時、後に残る私のことを憐れにお思ひになつて下さいましたのでせう。その御心を有難いと思ひますけれど、それは個人の問題でございます。夫に戦死の覺悟がございます時、妻にもその覺悟が無ければならないと思ひます。私共女子の生命も、國の中に見出されるものと思つて居ります。一郎様にも萬一のことがございましたら、私はほんとうに悲しいでございます。けれど、それを不幸とは申されないと思ひます。むしろ今こゝで一郎様から御断りの御言葉を伺ひます方がほんとうに不幸でございます。まだ御式は挙げませんでも一たん許婚ときました御方と結婚させていたゞき度うございます。それが女としての命でもあり、操でもあると存じます。御父様も御母様もどうぞ私の一生で一番大きな我儘、いゝえ一番眞剣なこの御願ひを容れていたゞきたうございます。」

早百合さんは御両親の前に手をついて深く頭を下げて居りました。私は不覺にも涙が溢れて來て、溢れて來て仕方ございませんでした。御母様も、そつとハンケチを取り出されま

この様にして俄かに御兄様の結婚式が舉げられました。そして御兄様は後事を早百合さんに托して、晴れ／＼と入隊なさいました。家には一郎兄様に代つて早百合姉様が老いた御母様によく仕へ、三郎や美智には優しい姉となつて、一生懸命世話をして居て下さいます。二郎さんにもよい御姉様が出來たのです。どうぞよろこんで下さい。

そして、うらはづかしいはづの新嫁は、式服から、筒袖、もんべの甲斐／＼しい姿となつて、隣組の御用やら配給品取りにと忙しく立ち働いて居ります。そして暇があれば鋏を取つて裏の空地を耕し「まあ、やつと今朝南瓜の芽が出ました。ほうれん草は今日は一極も延びた様です。こゝには時無大根と、赤蕪を蒔きませう。」と食糧増産に餘念もございません。ほんとうは早百合さんが來てから家の中が明るくなつて、生き／＼として居ります。

三郎は中學生の通年勤勞で工場通ひを至して居ります、朝早くから、夕方暗くなる迄、汗と塵にまみれて一生懸命働いて居ります。

美智もこの三月末、女學校を卒業致しましたけれど、あんなに望んでゐた上級學校進學を「私は戦争がすんでからゆつくり勉強をするこ

壇歌



京都傷療 松村市三郎
目的地近し機雷を見張りつつ行く
船団に雨降りやまず

評 鉛色の波浪、鉛色の空、雨
は船影をばかし四顧渺々たり、
いづれの地に上陸せんとするつ
はものぞ、敵地か占領地か、海
員は目的地近しと心ゆるめず一
心に機雷を見張り兵は上陸戦闘
の用意怠りなし

京都療養所 澤井 茂雄
雲染むる屍たらんと出でたちし汝
にしあれば肅と見送る

評 死を覚悟した人は徒らに大
言壯語悲壯がらない。送る方も
また放歌、高吟、喧騒をきはめ
ない。肅と出で立ち、肅と襟を
正して送る、生別死別の覚悟は
自らの心をシンとさせるもの
である。

鹿兒島 本村 益男
言ふことは何ぞあらむや征く學徒
ただをろがみて門に見送る

評 學業半ばでみくにのために
御奉公する學生さんたちよ今更
あなたに何のくだくだしい送別

の言葉を申上げませう。いづれ
も大御代に仕へる道です。併し
あなた方を心でをがんで見送る
親兄弟、師たちのあることを忘
れないで下さい。

秋田市 妹尾馬之助
氏神の大杉けふぞ召されけりやが
てくづれん敵のとりでは

東 京 阿部 千代
すめらぎのみたてとなりし兵の
幾千柱に國はゆるがじ

北海道 花田 順往
つかの間もこころゆるすな空に海
に仇波風は今おそひ來む

北海道 山崎ふじ子
遠えそめし散歩の足に玉の露けさ
またふれぬ心地よきかな

兵庫縣 水谷 良子
久々の雨も休まん暇もなし草履作
りにたのし此の日は

栃木縣 大輪 清
起きしあと目ざまし高く鳴り出で
ぬ時刻に勝ちたる朝のすがしさ

投稿 規定
官製ハガキ一回二首以内
淨土編輯部歌壇係宛に送
ること

とに致しました。とい
つて女子挺身隊に入つ
てこれも或る飛行機の
製造工場にセッセと通
つて居ります。また、
この人の結婚観がまこ
とにはつきりして居り
ます。

「かつては歐米思想の
影響を受けて、結婚を
個人のことに思つて居
りましたでせう、でも
日本人の結婚は、そん
な個人の問題ではあり
ません。家といふもの
を考へなくては意義が
ありませんものね。私
共の結婚には大きな
使命があるはずで
す。」

と申しますので

「その使命といふのは

と聞いて見ましたら

「早百合姉様を御覽遊ばせ」

といつてすまして居ります。末ッ子で、あんなにいつ迄も乳臭かつた子がこの様なことを言ふ様になりました。私共がまご／＼して居りますと若い人達に壓倒されてしまひさうです。戦争はこゝに素晴らしい女性を作つて居ります。

この次には二郎さんがお嬢様を貰はなければなりません、その時にはどんなによい御話があることとせう。私はそれを祈つて居ります。あなたもきつと覚えて居られると思ひますけれど亡くなられた御父様はよく私共にこの様なことを言つて御さとし下さいましたね。

「幸福といふことを人間は誰も希望し、これを求めることに一生懸命であるけれど、幸福は他から與へられるものでもなく、また探して求められるといふものでもない。幸福といひ、不幸といふのも結局はその人自身の中にあることだ。太陽は誰の上にも同じ様に照つて居るし、一日二十四時間は誰も同じである。」

咲く花も、照る月も観る人の心によつて色色に映るのであらう。人間は自分で幸福にならなければいけない。幸福を感じなければいけない。

幸福を見出す心眼を開かなければいけない。そして幸福を知り、幸福を感じたなら謙虚

俳壇



京都傷療所 澤井 弘陽

二三片こぼれそめたる花ざかり

峽はまだひそかに桑の芽こしらへ

名古屋 能野 秀國

春雨や友としあれば濡れかへる

比島派遣兵 福島 統

蜩や空腹きよく暮れてくる

栃木縣烏山町 大輪 玄海

鶯の聲に揺るぎて山明くる

京都市 福島孝治郎

練習機鮮かに舞ひ春の空

兵庫縣 水谷 良子

み戦も知らぬなりけり百千鳥

東京都 佐藤 英明

ほろ／＼と鳥啼く春の嵐かな

名古屋市 堀場 典雄

花吹雪ながるゝ澄つゝがなく

青森縣平館村 丸尾 傳山

道中のふまるゝところ露の鹽

東京都 坂口 康夫

春蠶のサナトリームの霊かなし

北海道傷療所 森元北遊子

山を背にめぐる里の轍かな

京都傷療所 松村市三郎

春芝の病閑あり暮を圍む

館山村 小宮 蒲柳

春霖のあがりし庭に下りたてる

北海道傷療所 富川 徳次

梅林の丘の向うの寮舎かな

名古屋市 松橋 進

一坪の苗植え終り空仰ぐ

東京都 山本 竹泉

曙の木蓮咲けり梢より

岩國市 長岡白朝居

青麥の中の小さき通路道

高知縣 竹原 教圓

敷きつめし眞砂の庭に春惜む

青森縣平館村 丸尾 傳山

古風も持ちだされけり春の風

官製ハガキ一回二句以内

投稿

淨土編輯部俳壇係宛に送ること

おことわり

この頃毎號發刊が遅れて申し譯
ありませんが、これを舊に復した
め、六、七兩月を續いて編輯いた
したため七月號だけ特に歌壇、俳
壇を休みます。従つて御投稿は八
月號より掲載いたします。(係)

な心でその幸福を感謝

して生きて行かなけれ

ばいけないのだし

といふ御言葉を私は

近頃沁々と有難く思ひ

出して居ります。

御兄様も早百合様も

三郎も、小さな自己を

捨て、大きな國の中

に生きて居ります。皆

幸福そのものゝ貴い姿

でございます。

御父様もどんなにか

満足して、それを見守

つて居て下さいますこ

とでせう。

あなたは小さい時か

ら大悟徹底して居りま

した。そのあなたが飛

行機で敵を撃つ日、ど

んなにか大きな働きを

なさることとせう。ど

うかあなたの體を大切

にして下さい。そして

心ゆく迄の御活躍を祈つて居ります。

御地も今は零下何十度といふ嚴寒を拂ひのけ

て、極樂淨土の様な美しい春がしのび足で來て

居りますこととせう。興安嶺に咲くといふあの

可憐な興安櫻が咲きましたなら、一枝早百合姉

様に贈つて上げて下さいませ。

一郎兄様は入隊以來まだ御便りがございませ

ん。あり次第御知らせ致します。

遂永々と書いてしまひました。では又後便に

ゆづりまして今日はこれで筆をおきます。御機

嫌よう。

さよなら

姉より

二郎様へ

篤志寄附者芳名

左記の通り本會活動資金にと篤志寄附下され
ました。深謝いたします。

二十圓

福岡縣遠賀縣蘆尾町柏原 繩田高次郎殿

十二圓八十七錢

東京都淀橋區西大久保一ノ四七九 相馬 黒光殿

十圓

福岡縣木室村下白垣 本村卯三郎殿

五圓

札幌市外琴似村西野 長島 アキ殿

一圓五十錢 大牟田市曙町一七 井村 直喜殿

信仰相談

(質問歓迎)

擔當中村辨康

一念多念と百萬遍

(問)

一念多念と云ふことをよく承りますか。その多念と云ふことから百萬遍と云ふものも出て来るものでせうか。百萬遍では大きな珠數に意味があるのでせうか。愚問で恐縮ですが右二問御教示下されたくお願い申し上げます。

(答)

(長野・上伊那・兼子義雄)

一念多念とは大體法然上人の淨土信仰がその當時の人々の心を強く刺戟したことに依つて惹起した問題であつて、要するに一種の反動現象であります。法然上人以前の念佛は「數量を貴ぶ」ところの多念主義でありまして、かの「小豆念佛」がそれを如實に證明して居ります。小豆

念佛と云ふのは珠數の代りに小豆を用ひて數を取つたのであります。飛鳥寺の願西と云ふ人は十數年に小豆七百石を稱へたと云はれ、鞍馬の重怡と云ふ人は十四年間に二百八十七石六斗餘、極樂寺の禪慧は三百餘石、渡邊黨の武士源傳は日々千遍の念佛で三十年間怠ることなく總計三十六億一萬九千五百遍を稱へたといふこととですし、關白頼長は百萬遍念佛を常に行ひ、父忠實への回向の爲に二十五歳の時から毎年四百萬遍の念佛を修したと云ふことであります。その外色々の例があります。が、これらの例でも分るやうに「百萬遍」と云ふことがその頃の風潮であり相當に流行して居たの

であります。これは獨り念佛ばかりではありませぬ。般若講、地藏講など云ふ法要を毎月行つて十三萬座つとめたとか、或は風呂場を作つて十何萬人に入浴させたとか、一字一石の寫經をやつてそれを築港の基礎工事に使用したとか、五寸の小塔を或は三十萬基、或は十萬基、二萬基、一萬基供養したとか、泥塔を八萬四千基を作つたとか、或は僧を得度するにも一度に一萬人度者をしたとか(度牒は木版にした)或は三十三間堂を造つて千體の觀音像を安置したとか、或は摺繪にも千體毘沙門、萬體觀音と云ふものを作るとか、寫經にも一人一筆で完成させるとか、謂ゆる「數」の多きを誇る風習が非常に流行したのであります。それで念佛も先に申したやうに「百萬遍念佛」が行はれ早いところでは慧心僧都の如きは數珠を棒にかけテザラザラと繰りながら百萬遍念

佛を行つたと言ふことですが、こんなことから遂に大きな數珠が案出されて百萬遍繰りの數珠と云ふものが用ひられるやうになつたことかと思ひます。法然上人の念佛はいはゆる「常念主義」であり「平生念佛」でありまして、これらのやうな「別時多念主義」の念佛ではありません。時々信行策勵の爲に「別時」は行はれましたけれども、仕事の中の念佛即ち毎日の常時の念佛であつて、生活の中に業務と念佛とが渾然一體化した謂ゆる「生活即念佛」の建前でありますから、以前から流行して居た多念主義の念佛とは根本的に異つて居るのであります。随つて「信」が強調されなければならぬのであります。多念主義別時主義ならば勢ひ念佛に熱中しなければなりませんから特別に「信念」の強さを要するわけもありませんが、平常生時の念佛とな

ると、たとへ聲に出さなくともその一擧手一投足が念佛的でなくてはならぬので、どうしても「信」が強調されますし「自體は聲を出すものと心得よ」との用心もすゝめられる譯であります。

御法語の「一念に（一遍の念佛でも）生ると信じて無間に（平生絶間なく）修すべし」と言ふお言葉をよく／＼味ふべきであります。が、之れが兎もすれば以前からの情性で「多念主義」になる傾向となり易いので、一方にはその反動と申しませうか、「信」の方に重きを置いて「一念でよいのだ。多念を求むるのは信不足の致すところだ」と考へるものがあり、それに高遠な哲學的な思想を加へて「佛智の一念」と云ふものに徹すれば最早平生の常念は必要でないといふ人も出るやうになりました。法然上人門下としては幸西とか行空とか云ふ人が専らさうしたことを主張したのであります。更には後

世ですがすつかり墮落して「念」と云ふ字は「二人の心」と書くから「一念とは男女二人の心を一にして念佛することである」と云ふ主張をするものさへ出て來ました。

これなどは「立川流眞言」の影響を受けて居るものであります。

また多念の方は隆寛律師あたりの主張でありまして、これはまた聖道門的「行」の考へが抜け切れず居ないからであり從來の考へがまだ生きて居るのであります。何れにしてもこれは片寄つて居るものでありまして法然上人の御信仰とは若干似て居るやうでもそれは唯だ一方的でありますから不完全であります。法然上人のお念佛は一念主義でもなければ多念主義でもありません。形から云ふと信は一念で行が多念であります。ですから一念主義にも見え多念主義にも見えるのですが信はさう云ふ數量をあげつらふものでもなく、またさうした形式にかゝはつ

て居るものでもありません。つまりは生活なのです。それも露骨的生活でなく國民の一員としての生き動いて行く業務生活の源泉として「信」があるのであります。この故にこの信の前には一念とか多念とか云ふことは問題ではないのであります。

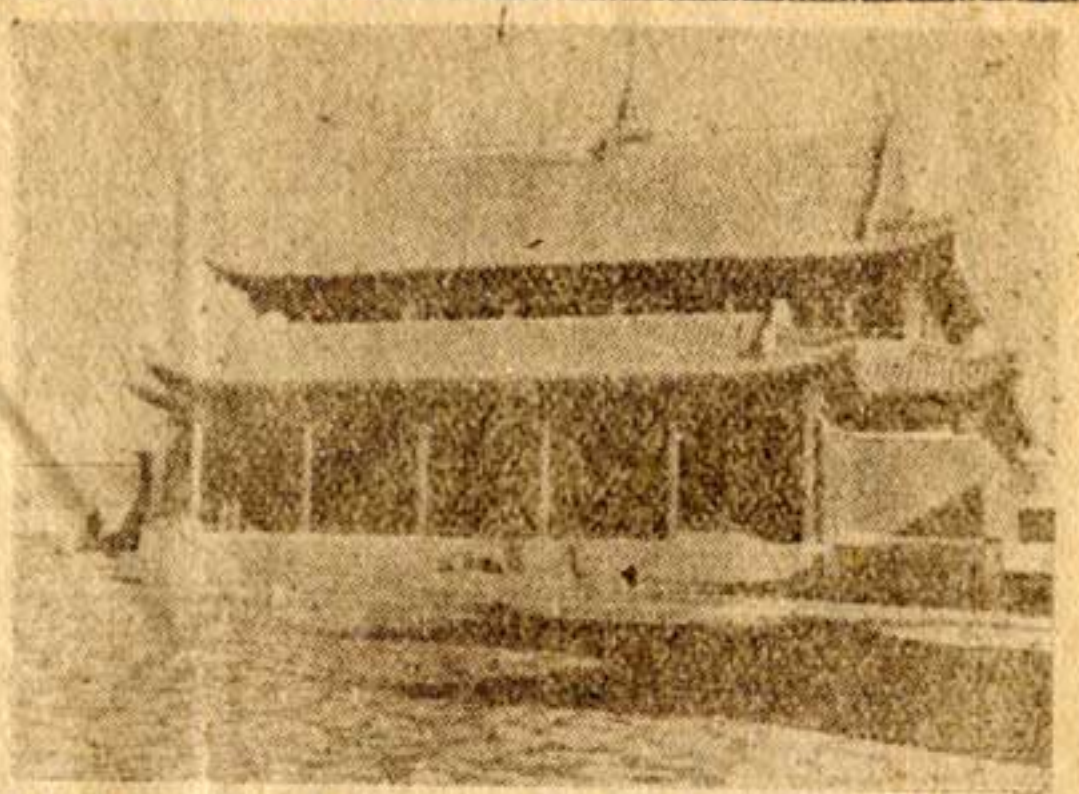
次の百萬遍のことは多念主義の産物であり無論法然上人以前に流行して居たものであつて、法然上人の信仰にかゝりはありませんが、それが淨土宗に取り入れられたのは百萬遍知恩寺法主が勅命に依つて御願平癒の爲に百萬遍念佛を修しましたが、その結果爾來知恩寺のことを「百萬遍」と稱するやうになり淨土宗のお寺に「百萬遍」が行はれるやうにもなつたのであります。嚴正批判すれば「百萬遍念佛」は淨土宗のものではありませんが、日本の佛教は何宗に限らず或時代に於て皇室の御意信があつて「上行ふところ下之に倣

ふ」の譬への如くそれが民間に廣まつたのでありますから、この點になりますと「よいわるい」の問題は超越してしまふことになるのであります。

また百萬遍數珠が大きいのは大勢でやれば短時間に「百萬遍」が満つるからでありまして譬へば百人でやれば一萬遍の念佛で百萬になると云ふわけからであります。純粹信仰から言ふと變なものです。が、之れも時に從ひ人に從ひ機縁に從つて適當におやりになつたらばよろしからうと存じます。

相馬黒光女史から恒例花祭りのお賽錢御寄附

東京一の雑沓といはれる新宿で忙しうに道行く人が、ふと足を止めて、さゝやかながら立派に飾られた中村屋花祭りの前に合掌しお賽錢をあげてゆく。そのお賽錢、十二圓八十七錢を相馬黒光女史から本會へ、活動資金の一部にと御寄附下されました。



鬼打の廟子貝

(上) 寺マラの古蒙

治山司貴

業に従事してゐる。

あとの半分のゴビ地帯といふのは、粗い砂質の土地で、南側の黄土地帯が海拔五百から九百メートルの間にあるのに反して、ゴビ地帯は一千乃至一千三百メートルの高さによこたはつてゐる。

このゴビ地帯が俗に蒙古高原と呼ばれてゐるのであるが、地質からいふと、草原も沙漠も、どつちも同じゴビ地帯なのである。ゴビとは蒙古語で「こまかい砂」の意味、すなはち沙漠のことである。

現在の蒙古自治邦は、日本本州に朝鮮を合せたほどの横に細長い國である。これを縦に二つに分けて、南側半分が黄土地帯、北側半分がゴビ地帯である。

黄土地帯といふのは、支那の全地域を蔽ふきはめて微細な黄土によつてできてゐる地質である。ここでは支那にみるやうな農耕が営まれうる。だから蒙古の半分を占める黄土地帯には凡そ五百萬の漢人が進出してきて、農

私は最近にこのゴビ地帯をずるぶん奥の方まで旅行した。東蒙古を飛行機で飛ぶと、沙漠の起伏が地平はるかにつづくあなたに草原がよこたはつてをり、どちらでもまるで死の世界のやうにぞつとするやうな感じである。飛行機からみおろすかぎり、そこには生きて動いてゐるものはない。ぞつとする感じはそのせみだとわかる。

蒙古の高原には十萬人以上の蒙古人が散在してゐるときいたが、この荒涼たる死の世界のいつたいどこにかれらが住んでゐるのか？ 見當もつかない別世界であつた。

2

やがて私の乗つてゐる飛行機は、プロペラの回轉がぶくなくなつて、無氣味に下降しはじめる。氣がつくと私のすぐ目の前に大地が迫つてきて、その地上に眩い黄金色の大殿堂の屋根が光つてゐるではないか！

私は無人の曠野の真ん中に、まるで千一夜物語の中にあるやうな黄金色の大殿堂をみいだして、それも飛行機からおりながら……夢かとばかり臉をこすつた。

着陸してみるとそこは多倫であつた。多倫は東蒙古の草原の都市である。黄金色の殿堂は多倫のラマ寺であつた。飛行機は五分間そこにおりただけですぐに又飛び立つたために、私は多倫の町の中を歩く機會も、そのラマ寺をみるをりをも失つた。

私はさらにそこから東に飛んで、ずつと奥の貝子廟におりた。貝子廟は東蒙古のシリントール盟(盟は州の意味)における最大のラマ寺で、昔はここに三千人のラマがゐたが、今

は千八百人とかに減つてゐるときいた。千八百人にしたところで、それだけ大勢のラマが住む以上、寺の構へは容易ならぬ大きさである。

オルドン・トロガイといふ名の小高い丘の麓に、本堂を中心に何十といふ建物が大小入り混れて屋根をならべてゐる。この一郭を貝子廟と呼ぶのである。蒙古の奥地では、寺のあるところはすなはち都會であつた。

普段は廣漠たる草原に分散して、羊の群を追ひながら牧草をもとめて暮してゐる蒙古人は、夏がきてお祭り——打鬼法會——の日がくると、一年中の歡をこの時に散じつくさうとばかり、諸方から廟をめざして集つてくる。

打鬼法會は舊曆の六月十一日だが、この日にはさしにも廣い貝子廟の前庭は朝早くから蒙古人で一ぱいになり、牛車や牛や馬が寺の

まはりに密集し、包は建てられ、それらをめあてに漢人商人の市場が立つ。その賑ひといつたらない。

やがて鳴りひびく大喇叭と太鼓と銅鑼の音につれて、寺の廣場では打鬼が演ぜられる。打鬼の演技について詳しく語つてゐると際限



もないが、それを簡單にいふと、はじめに白い小鬼が何人も廣場にできて踊りを踊る。かれらが一と踊り踊つて退場すると、舞樂はいよいよ鳴りひびいて、人骨でつくつたといふ人骨笛の囀鳴たる音につれて地獄の閻魔大

王が本堂の中からあらはれてくる。

黄色の着物を着て赤い袈裟をかけた何百人といふラマたちが密集してゐる真ん中をわけて、恐ろしく巨大な閻魔大王が石段の上に姿をあらはす。支那の大官が着るやうな大きく長い三角袖のきらびやかな青と黄の上衣を着た閻魔大王の顔は、コバルト色に塗りこられた物凄う牛の顔だ。コバルト色といつても、頭の真ん中と兩頬には紅蓮の焰が燃えあがり、角のさきには黄色の毛をはやし、眉毛も口髭も大きな黄色い毛だ。鼻と口は眞つ赤に顔の下半分を占めてゐる。眼玉は太い黄色い眉毛を上下にかこんで三つある。頭の上に燃えてゐる紅蓮の焰の中に白い骸骨が五つ飾られて、おまけに手には骸骨をつきさした棒みたいなものを持つてゐる。

赤い轡をはいてこの閻魔大王が、奇怪な牛面を左右に振り動かして石段をおりると、廣場の真ん中で、丁度わが國の舞樂に似たやうな踊りを踊るのである。大へんな装束だから疲れるらしく途中で時々一服しては、約二十分くらゐ踊る。

この閻魔大王の踊りのあとで再び人骨笛が鳴りひびくと、その音に誘はれて又多くの小

鬼たちがでて踊る。しかし今度の小鬼は角がはえてゐない。かれらのあとから法術師と呼ばれる扮装者が同じ数だけあらはれ、雙方入り亂れてその數約百數十人、廣庭全體に二個の大きな圓を描いて、ゆるやかな輪舞を演ずるのである。この間、雅樂に似たラマ教の音楽が鳴りひびいて、打鬼の野外劇は高潮に達する。輪舞の形式は、ゆつくりとまづ片足をあげては上身を前に屈し、同時に手をひろげて三角形の大きな裾をひるがへし、次ぎにもとの姿勢になほつて少し歩き、又同じことを繰り返して行く。

觀衆は、正面高座に寺の長老以下の役僧たちがむらがり、それに向ひあつた廣庭の端の白いテントの中には蒙古政府の照(州)の役人たちが——昔ながらの札薩克、貝勒、協理台吉などといった連中が詰めかけてゐる。それらの妻女である貴婦人たちも珊瑚やエメラルドなどの飾りを簾のやうに頭や首に飾つて、けふを晴れの禮服を着てテントの中にちらほらしてゐるのもなまめかしい。

盛夏の太陽はさんさんと降りそそいで、群衆の上に照つてゐる。そしてここを先途と演ぜられてゐる輪舞は、法術師が法力を揮つ

て、閻魔大王の眷屬たる小鬼たちを打ちあらふ儀式なのである。

したがつてこの輪舞のおしまひは、小鬼たちが法術師に追はれて門の中へかへつて行くことによつて終り、そのあとへ再び閻魔大王があらはれる。と、最初のやうに廣場の真ん中にでて劍を打ちふり、青牛の面を前後左右に動かし、身をふるはせて、苦しみ悶えるやうな踊り方をする。これで踊りがすんで、石段の上のラマや一般觀衆が一時にざはめく。

3

すでにこの時、正門前の兩側は、弓や鐵砲、矛、刺股などを振りかざした扮装の武人によつて警備され、その中高さ十尺ばかりの黄色い紙でつくつた頭蓋骨の惡鬼がラマたちの手によつてはこびだされ、門前の机の上におかれる。同時に寺の正門は大きな垂れ幕でとざされる。

頭蓋骨の惡鬼のまはりには、雞のとさかみたいな帽をかぶつたラマたちがわんさと集つて、喇叭を吹き、太鼓を鳴らし、銅鑼を打ちながら讀經する。

この行事が終ると、頭蓋骨の惡鬼——蒙古語でソルと呼ばれる——は、坊さんたちによ

つて擔ぎあげられ、貝子廟前方のかねて定められた草原へはこんで行かれる。扮装をした警固の武士たちが前後左右にあつてこれを護つて行く。札薩克以下の役人たちは太い線香の束に火をつけてみなついて行く。一般觀衆はそれを見るためにあとにしたがふのもあり、寺の庭にのこるもあり、早くも漢人たちの市場の方へ流れたすもあり……

やがて三四町もはなれた草地の中で、ラマたちの讀經の行はれる中でソルは火の中に投げこまれて焼かれてしまふ。惡魔は追ひはらはれ、焼滅させられたのである。

これが草原の夏の生活を彩る打鬼法會の有様である。打鬼が終るのは正午すぎで、午後には鬼が打ちあらはれて寺の門内には福の神が祀られる。蒙古人たちはこの福の神に參詣して、けふの目的を達し、おのおの馬に牛車に包をたたんで、それぞれ再び無人の曠野へと四散して行く。

夕暮とともに、貝子廟の廣場は普段とかはらないひつそりとした廣場となる。けふ一日の賑ひがかへつて夢のやうで、夜に入るとはれた空に、お盆に近い月が出て、大草原の寺の屋根を照らすのである。



時々々は懸命に念佛を

法然上人法語解説(其三十)

中村 辨 康

法語

時々別時の念佛を修して心をも身をも勵まし調へ進むべきなり。日々に六萬遍を申せば七萬遍を稱ふればとて、唯だ在るも云れたることにてはあれども、人の心ざまはいたく目もなれ耳も馴れぬればいそいとすゝむる心もなく、明け暮れいそがしきやうにてのみ疎略にはなりゆくなり。その心をため直さん料に、時どき別時の念佛は爲べきなり然れば善導和尚も懇ろにすゝめ給ひ、恵心の往生要集にも勸めさせ給ひたるなり。道場をも引きつくるひ花香をも参らせんこと、殊に力の堪へんと隨ひて莊り参らせて、我身をも殊に清めて道場にいらて或は三時、或は六時などに念佛すべし。若し同行など數多あらん時はかはるゝ入りて不斷念佛にも修すべし。かやうのことは各々事柄に従ひて計らべし。(七箇條起請文。法語抄一五三——一五四)

解説

念佛の行儀の本態は平生を中心とするものであつて、別時行儀を中心とするものでないことは今更申すまでもありませんが、熱心になると別時念佛が好きになつて、念佛とし言へば別時念佛より外はないとさへ思ひたがるものであります。別時とは一日乃至七日の念佛會、又は四十八夜乃至百日の念佛結集を初めとして、朝夕の勤行の時など佛前にすはつて特別に營む念佛を「別時の念佛」若しくは「別時行儀」と稱へて居るのであります。それが爲によく「あの人には餘り念佛をしない」と批評することがありますが、それは「念佛とは佛前に据つて聲を出し木魚を叩いて南無阿彌陀佛々々々と唱へること」と思ひ誤つて居るからであります。それでは「平生念佛」と云ふものを無視して居ると云ふもので、正しい批評とは言はれません。かゝる批評をなす人に凡そ二種類あります。一は餘り念佛したと

のない人、二は別時念佛ばかりして居る人であります。それらは支那的半亡國的思想の持ち主であり、少くとも現段階に於ける活きた考への所有者ではありません。

と云つて『別時念佛はいらぬ』と言ふのではありません。英雄閑日月有りで、忙がしい時であればあるほど尙更に若干の閑時が必要なのであります。かの秀吉が小田原征伐の時に「茶會」を催したことや、又は家康が大阪陣の時天王寺の荒陵(現に一心寺に其茶席が残つて居ります)で諸將と共に戦況を見ながらお茶を飲んだことなど「忙中閑」の「閑時」が極めて大切であり有効であることが痛感されるのであります。

ですから此の御法語にも「あけくれ心忙がしきやうにてのみ疎略になり行く」とありますが、その心をため直さんが爲に「時々別時の念佛」が必要であり、目になれ耳になれて段々怠慢になり行く心を引きしむべく「時々別時の念佛」が必要なのであります。

別時行儀は一般には阿彌陀經の「若一日乃至若七日一心不乱」の文句に準據し、善導大師の觀念法門の御指南に順つて行ふものであります。よく七日間行はれます。忍徴上人著「別時念佛三昧法語註」一卷は此の善導大師の觀念法門中の別時行儀を註釋したものであります。光明會などで行はれて居るのは大體之に依つたものですが、多少の相

違はあるやうであります。

然かも此の別時の時の念佛用心は「見佛想」に住すべきやうに示されて居ります。

「見佛想」とは「現に目前に佛まします」と云ふ想ひを以て、その目前にまします如來様に「南無々々」と「南無」の一念を相續することとあります。結局は「歸命想」と大差ないのですが、唯だ歸命想と異なるところは念佛にとりかかる時に「佛見えたまへ」と希念し「光明徹照」の御姿を想像するのであります。之に反して平生の時は念佛しても特別に座を構へることはありませんから、唯だ歸命の念をなしつゝ南無阿彌陀佛と唱名するだけで、はげしく用心を用ひることはないのであります。

この歸命想と見佛想とは畢竟二にして一なるものと思ひます。

元來念佛とは聲に「南無阿彌陀佛」と出すことではあります。十二箇條問答の中に聲を立てゝ申すのがよいか、又は心に念じて數を取るのがよいかと云ふ質問に答へて法然上人は「何れも往生の業なれども稱名の願なるが故に聲を立てゝ稱ふべきなり。耳に聞ゆる程は高聲念佛にとるなり。さたばとて機嫌を知らず高聲なるべきにはあらず、地體は聲に出さんと思ふべきなり」と答へられましたやうに、心で念するだけでなく、念するが故にこそ「聲にも立

てる」のであつて「聲に立てさへすればよい」と云ふのでないことは明了ですし、西宗要を始め七巻書の中の決答疑問鈔などの中に法然上人のお言葉として「歸命想」「見佛想」「往生想」等の念佛意地が言はれて居るところを推して考へますれば、法然上人時代に於て念佛を聲にあらはす外に、内にかうしたたぐひの想念のあつたことを證明するのであります。

一般に「唯だ申す」と云ふことを言ふのは、大まかに充分許して言つて居ることばであつて「だからそれでよいのだ」と考へるのではないのであり且つ極めて横着な考へです。それから、そんな人は絶対に救はれません。則ち「唯だ申しの念佛」は信仰に入るまでの過程に於て許されることです。しかも一度信を得た限り、如來様のことの思はれない信仰はない筈であつて、そこには必ず「見佛想」があり「歸命想」がある筈であります。

然かも「見佛想」のない歸命と云ふ事實もなく「歸命想」のない見佛もあり得ないのでから、見佛想と歸命想とは畢竟表裡相應して同時に現象する精神状態であらねばなりません。

唯だ平生念佛は歸命想が見佛想よりも強く別時念佛の時は見佛想の方が歸命想よりも強いと云ふだけの相違ではないかと存じます。

然かも若干の時間をそれに專注するのでありますから、念佛のはげみになつて信念の度を高め行くことが出来ますから、時々別時を行つて修行共に向上し進歩するやうにしたいものであります。

時計でもネヂを巻く必要があります。機械でも休ませて置いてはいけません。時々油をくれる必要があります。何事でもそうです。毛嫌ひせずには時々策勵の爲に別時をしたいものです。

お願いと御禮 本誌發行部數に制限があり近時白衣の勇士に法味を捧げる「慰問淨土」が不足勝ちで困却いたしてゐたところ、會員各位から御高見濟みの「淨土」を多數お贈り下され厚く御禮申し上げます。當部では早速これら御芳志の「慰問淨土」を順次各病院の方へ送つてゐます。又いろいろとお問合せもあります、餘り古いものは折角ながら御遠慮を願ひ、なるべく新しいものを頂戴いたしたく存じます。「慰問淨土」、「第三種郵便物」と表記して下さい。送料は百瓦まで二錢ですからお含みおき下さい。たゞし帶封か開封にして、小包のやうにしつかりと十文字に紐で結ばないで下さい。尙御贈り下された各位に一々御禮を申し上げるべきですが、毎月五百部以上にのぼつてゐますので、失禮ながら誌上をかりて御禮を申し上げます。

名氏所住

中村 辨康 著

新刊 信仰問答

賣價三圓十五錢
送料 廿四錢

「浄土」創刊以來連載の「信仰相談」から主なもの約二百を選び系統的に配列しました。誰もが知りた難問疑義に對し明解を與へた興味深い活きた信仰案内書です。問ふものの切實な悩みや疑ひに對して親身に懇切に指導してゐます。

郁芳管長祝下名號御執筆

浄土宗日常勤行式

頒價八十五錢（送料共）
折本、縦五寸五分、横二寸五分

本文二號活字、總假名ツキ、特に一般信徒用として編纂されたもの。

申込所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

編輯後記

◇吉田絃二郎先生宅の竹林は、特に壯麗を以て知られてゐますが、先頃當部に澤山の竹の子を下され、一同有難く舌鼓を打ちました
◇池田立基先生から久し振りに玉稿を頂きました。國民一人々々が一騎當千の士たれとは先生の持論であります。
◇貴司山治先生はこの程蒙古の旅から歸られ、本誌に御連載を頂くことになりました。
◇高橋安子女史は、靖國の夫君の遺志をついで御活躍中です。
◇白衣の勇士に差し上げるため御高賢濟みの本誌の御返送をお願いしましたところ多數の御寄贈があり感激してゐます。中には昨年、一昨年のものでお送り下され、しかも少しも汚れてゐないのに一驚しましたが、勝手ながら餘り古いものは病院に送り難いので今年中のものを願ひます（村瀬）

浄土 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和九年五月二十日印刷納本
昭和九年六月一日發行

（定價十二錢）

東京都芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼 眞野正順
發行人

東京都芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄

東京都牛込區市ヶ谷加賀町二ノ三
（東京二）
印刷所 大日本印刷株式會社

配給元
東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社
發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番
會員番號二三〇〇〇七

「浄土」購讀規定

定價 金十二錢
（送料二錢）

（送料二錢）

會費 金一圓六十八錢
一ヶ年
（送料共）

振替納入はすべて十錢増のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十九年五月廿日印刷納本・昭和十九年六月一日發行

浄土

第十卷 第六號

（停）定價金十二錢（送料共）